
古代アメリカ学会会報

第27号



「ペルー・イカ県 インヘニオ谷サンフランシスコ遺跡の盗掘状況」（2007年5月撮影）©馬瀬智光

目次

- ◆会員からの投稿
- ◆『古代アメリカ』の原稿募集
- ◆新入会員
- ◆研究大会のお知らせ
- ◆事務局からのお知らせ
- ◆年会費の値上げについて

2010年3月

*本稿掲載文・写真の無断転載・複製を禁じます。

会員からの報告

●ロレンソ先生の思い出

井上幸孝（専修大学）

2009年12月7日午後、メキシコ国立自治大学（UNAM）人類学研究所（IIA, Instituto de Investigaciones Antropológicas）の研究員、ロレンソ・オチョア・サラス（Lorenzo Ochoa Salas）先生が亡くなられた。1943年生まれなので、まだ60歳代半ばである。マヤ・メキシコ湾岸を専門とする考古学者のロレンソ先生は、ベラクルス州トゥspanの出身で、国立人類学歴史学学校（ENAH）で修士号を取得、その後はUNAMの哲文学部で博士課程を修められた。1973年から研究活動を始め、150を超える学術刊行物、十数点に上る一般書を著され、ベラクルス州やタバスコ州などで6つの考古学プロジェクトを進められた。日本での出版物もあり、2007年には本学会の学会誌に論文（「三都市同盟とワステカ地域の征服」、『古代アメリカ』、第10号、井上幸孝・古賀優子訳）を寄せていただいたほか、同じ年には他の学会誌でも書評（Kazuyasu Ochiai (coord.), *El mundo maya: Miradas japonesas*, Mérida, 2006 の書評、『ラテンアメリカ研究年報』、第27号、スペイン語で掲載）を執筆された。考古学者本来の仕事に加え、民族誌や歴史資料の分野でも重要な仕事を残された研究者であった。

* * *

筆者が初めてロレンソ先生に出会ったのは1995年のことであった。メキシコ外務省の奨学生として渡墨した私のUNAMでの所属先は、受け入れ担当になってくださったアルフレド・ロペス・アウスティン先生がいるIIAで、そこで最初に知り合った方々の一人がロレンソ先生だった。第一印象は非常に気さくな先生で、まだスペイン語すら不確かな筆者に対しとても優しくくださった。

やがてUNAMでの日々を過ごす中、一般的なロレンソ先生のイメージがこれとはまったく違うことも知ることになった。この留学の頃、筆者は何度かUNAMの哲文学部の学生たちと遺跡や史跡の見学の旅に同行し、ロレンソ先生が引率するオアハカ旅行にも参加した（写真1）。現地の遺跡等で学

部生たちが事前に調べてきた成果を発表するのだが、引率教員である彼のコメントはいつも辛口だった。「誰がそのように述べているのか」、「どういいう情報源にそういったことが書かれているのか」と問い詰められる発表学生たちは緊張のし通しだったことだろう。また、同じオアハカ旅行では、昼間からバス内に酒を持ち込んだ学生に対し厳しく叱りつける一幕もあった。こうした場面を日々目撃している学部生たちからすれば、彼は非常に厳しく、様々な面で高い要求をする先生だった。それはまさしく彼の学問的な態度に通じており、研究者・大学教員としての厳格な振る舞いであった。これに対し、最初に筆者が知った「気さくなロレンソ先生」という側面は、ほとんどの学生たちが知らない一人の人間としての面だったわけである。学生を前に妙に馴れ馴れしい教員や、友達のように子に接する親が増えていると言われる昨今、学生の前でこれらをしっかりと使い分けていたことは、筆者も見習わなければならない。

その後もメキシコに赴く度に筆者は何度もロレンソ先生のお世話になった。ある時は、夫婦でご



写真1： 1996年5月、オアハカ旅行（ミトラ遺跡）にて

自宅に数週間滞在させていただいたこともあった。スペイン語を片言しか解さぬ妻は、自宅でくつろぐロレンソ先生をつかまえては周囲にあるものを指さしながらスペイン語の単語を尋ね、彼もこれに気さくに応じてくれていた。また、別の時にはやはり夫婦でお誘いをいただき、午前中早くにメキシコ市を出発して車でモレロス州のチャルカツインゴ遺跡の見学に同行させていただいた。同遺

跡の有名な「エル・レイ」のモニュメントはこの聖なる小山の一つの中腹にあるのだが、筆者夫婦を含め 30 歳代～40 歳代の私たち同行者を差し置いて、当時 60 歳代初めのロレンソ先生は真っ先に上まで登られ、その元気さに一同驚かされたものだった。

昨年、彼の研究室を訪れた際にもあたたかく迎えていただき、様々な学問的な話を伺った。そして、数年前に生まれた筆者の子の写真をパソコンに大事に保存してくださっているとも伺い、筆者がさらに何枚もの写真をお見せすると、ご自身の孫の写真を見るかのように柔らかな目で楽しそうに感想を述べておられたのが印象的だった。結局、この時の滞在で 3 度ばかり彼と顔を合わせたのが最後になってしまった（写真 2）。帰り際にはわが子への贈り物もいただいたのだが、その贈り物の服を着せた写真をお見せできなかったことが心残りではない。

彼から直接指導を受けることはなかったが、研究者・教育者としての厳しさが普段から存分に伝わってきた。そして、それとは別に一人の人間としての優しさという面も見せてくださった。研究者として、大学の教員として、目指す道標を一つ失ったような気がしてならない。ロレンソ・オチ

ョア・サラス先生のご冥福を心よりお祈り申しあげるとともに、奥様のアナ・ベジャさんをはじめ残されたご家族に深い哀悼の意を捧げたい。

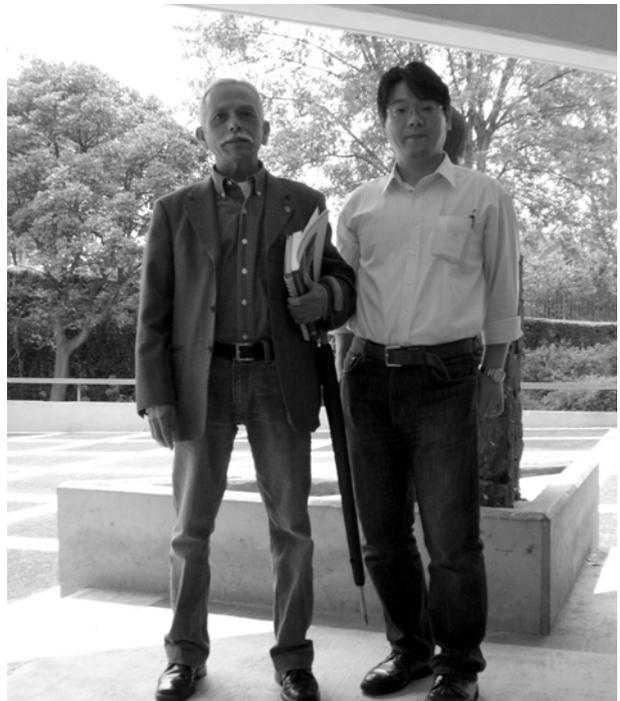


写真 2： 2009 年 9 月、UNAM-IIA にて

●2009 年度ペルーにて開催された考古学シンポジウムについて

総合研究大学院大学 浅見恵理

2009 年には、リマにある 2 つの大学で考古学に関連するシンポジウムが開催された。幸運にも、どちらにも参加することができたので、概要報告をさせていただきます。

まず、カトリカ教皇大学にて 8 月 28 日から 30 日にかけて、「VII SIMPOSIO INTERNACIONAL DE ARQUEOLOGÍA PUCP 《Lenguas y sociedades en el antiguo Perú: hacia un enfoque interdisciplinario》」が開催された。本シンポジウムは、近年の先住民言語（ケチュア語、アイマラ語、プキナ語、モチカ語）に関する研究の進展を重視し、考古学や民族学等の研究成果と相互的な関連性をもたせ、古代ペルー社会を捉えるという画期的な試みだった。

まず初めにケンブリッジ大学のコリン・レンフ

リュウ氏の基調講演が行われ、アンデスにおける考古学と言語学に関する多様なモデル、特に考古学的見解によって変わる言語学の変容についての発表があった。この講演を受けて、アメリカ合衆国、イギリス、フランス、フィンランド、オランダ、ドイツ、コロンビア、ペルーの各国から集結した考古学や言語学の研究者の発表が 3 日間にわたり行われた。

日本人では、南山大学の渡部森哉会員が「Continuidad y elementos foráneos en la cultura Cajamarca, sierra norte del Perú: el caso del Horizonte Medio」というタイトルで発表を行った。渡部会員は、主に 2006 年に実施したパレドネス遺跡の発掘調査の概要を述べた。その調査成果を踏まえて、ペルー北部山地のカハマルカ地域で展開したカハマルカ文化と、他要素として入ってきたワリ文化の関係性について考察した。渡部会員の発表は豊富な写真と巧みなスペイン語の話術で会場を沸かせ、みな真剣な眼差しで聞き

入っていた。発表後は活発な質疑応答が行われ、聴講者の関心の高さが伺われた。

一方、国立サン・マルコス大学では、10月26日から31日の6日間にわたり「XVI Congreso Peruano del Hombre y La Cultura Andina y Amazónica “Julio César Tello Rojas”」が開催された。本来ならば9月に開催予定だったが、世界的に流行した新型インフルエンザの影響を受けて開催が延期となり、10月末に実施されたのである。

本大会は、考古学、人類学、歴史学、社会学等の8大テーマに分かれ、それぞれ小テーマが設けられた。例えば考古学の小テーマは多岐にわたり、「インカ」に関する考古学的研究や民族学的研究、特定の遺跡や地域に焦点をあてた研究、アンデス社会の世界観やイデオロギーに関する研究、民族史に関する研究等であった。

そのような中で、先史アンデスの形成期に焦点をあてた発表テーマがあり、日本人では東京大学総合研究博物館の鶴見英成会員がカルロス・モラレスと連名で、ヘケテペケ谷中流域に位置するテンブラデーラで実施した発掘調査に関する発表を行った。また、同じ会場で松本雄一会員がユリ・カベロと連名で、アヤクーチョに位置するカンパナユック遺跡の発掘調査の報告を行った。さらに、国立民族学博物館の関雄二会員が統率するカハマルカのパコパンパ遺跡考古学プロジェクトに関する発表テーマが独立して設けられた。本プロジェクトは2005年から国立サン・マルコス大学と合同で実施されており、これまでの考古学調査で得られた成果と、2009年9月初旬に発掘調査で発見された最古級の金製品を副葬した墓の調査報告がな

された。また日本人では、荒田恵会員が本遺跡の石器製作に関する研究報告を行った。金製品を副葬する墓のニュースは、ペルーのみならず日本でも大きく取り上げられたほど衝撃的であり関心を惹いたため、会場には大勢の人が詰め掛けた。

筆者も後に続けとばかりに、発掘調査の真最中ではあったものの研究発表を行った。発表テーマが「中央海岸の考古学：形成期からインカ期へ」と題された会場で、チャンカイ文化にみられるラウリ・インプレッソという土器形式の分布に関する研究発表を行った。本会場では筆者の他にも2本、チャンカイ文化の建築物に関する研究発表と、チャンカイ文化の動物表象の分析をもとに世界観にまで言及した発表がなされ、会場から多くの質問が出された。これまでチャンカイ文化研究は等閑視されてきたが、本大会の様子から今後の発展が期待される研究領域であると認識し、確かな手応えを得ることができた。

カトリカ教皇大学の国際シンポジウムは、主にペルー国外の研究者を招聘して行われる一方で、国立サン・マルコス大学の研究大会はペルー人研究者の発表が主であった。そのどちらにも若い日本人研究者が参加し、研究発表の機会を持つことができるのは、とても恵まれた環境にあると感じた。これもひとえに、日本アンデス考古学調査団が50年かけて築いてきた研究成果と信頼関係の賜物である。これからもその精神を引き継ぐとともに、更なる先史アンデス研究とペルー社会の発展にどのような貢献ができるのか、常に考えながら前進する責任感に身が引き締まる思いである。

『古代アメリカ』の原稿募集

会誌『古代アメリカ』第13号(2010年12月発行予定)に掲載する原稿を募集します。投稿希望者は、会誌に掲載されている寄稿規定、執筆細目をよくお読みください。論文原稿は、随時募集し、査読を終えたものから(原稿受領後1~2ヵ月で査読終了予定)順次掲載する予定です。

投稿希望者は、編集委員会宛(下記佐藤宛)にメールまたは郵便にてご連絡ください。編集委員会より、「投稿カード」を配布致しますので、これを提出

原稿に添付してください。

なお、原稿掲載の可否は、規定による査読結果を踏まえて、編集委員会が決定します。

*投稿に関するお問い合わせ:

佐藤悦夫

〒930-1292 富山市東黒牧65-1

富山国際大学現代社会学部

Tel: [REDACTED], Fax: [REDACTED]

E-mail: [REDACTED]

2009 年度第 1 回役員会議事録

日 時：2009 年 12 月 4 日（金）15:10-18:00

場 所：南山大学 南山学園研修センター会議室
出席者：大貫良夫、関 雄二、青山和夫、伊藤伸幸、
坂井正人、佐藤悦夫、鶴見英成、佐藤吉文、

荒田 恵

委任状提出者：馬瀬智光

議 長：関 雄二

書 記：浅見恵理

定足数の確認（代表幹事 関雄二）

出席者は委任状提出者を含め 12 人であり、役員
の半数以上の出席が得られたので、役員会が成立
したことが報告された。

1. 前回役員会議事録の確認（代表幹事 関雄二）

2008 年 12 月 5 日に開催された、第 6 期役員会
および第 6 期・第 7 期合同役員会の議事録の確認
が行われた。

2. 2008 年度各委員会事業報告

(1) 学会誌編集（会誌編集担当 佐藤悦夫）

2008 年度事業計画に則り、本学会誌『古代アメ
リカ』第 11 号の発行（2008 年 12 月）および同誌
第 12 号の編集・発行準備が実施されたことが報告
された。

(2) 会報編集（会報編集担当 馬瀬智光、代読 佐 藤吉文）

2008 年度事業計画に則り、2009 年 3 月および 8
月にそれぞれ会報 25 号、26 号が発行されたこと
が報告された。また、会報掲載の「会員からの投
稿」原稿を安定的に確保するため、研究者による
原稿執筆者の確保および担当役員への紹介が要請
された。

(3) 研究大会等の報告（事務幹事 佐藤吉文）

①古代アメリカ学会第 13 回研究大会・総会が
2008 年 12 月 6 日（土）に早稲田大学戸山キャン

パス 36 号館 681 教室で開催され、会員 51 名、一
般 18 名、計 69 名の参加があったことが報告され
た。また、②第 1 回古代アメリカ学会主催公開シ
ンポジウム「マヤ文明とアンデス文明の調査と国
際協力」が 2009 年 6 月 21 日（日）にたばこと塩
の博物館で開催され、84 名の参加を得たことが報
告された。さらに、名義協力事業として③「“Centro
y Procesos Sociales” Concepto vs. Contexto en
los Estudios sobre la Civilización Andina para
los Periodos Arcaico y Formativo」が、2008 年
11 月 28 日（金）～30 日（日）に国立民族学博物
館にて、④日本アンデス考古学調査 50 周年記念公
開シンポジウム「古代アンデス文明 過去との対
話」が、2008 年 12 月 13 日（土）によみうりホー
ルで開催され、後者については約 750 人の参加者
があったことが報告された。

(4) HP、広報（広報担当 伊藤伸幸）

2008 年度のホームページ維持費としてレンタ
ルサーバ利用料 7,560 円、HP 管理作業補助者 1 名
として謝礼金 7,280 円の支出があったことが報告
された。また、HP のアクセス数を把握するため、
今年度内にカウンターを設置することが検討・了
承された。

(5) 名簿作成（事務幹事 佐藤吉文）

2008 年度の名簿作成に関する日程と手順が報
告された。特に、回収率を高めるために電子メー
ルと郵送の二本立てで会員情報フォームを送付し
たことが報告された。

(6) 学術情報の普及に関わる戦略検討ワーキング グループ（研究担当 青山和夫）

2009 年 9 月に提出された答申案に沿って「学術
情報の普及に関わる戦略検討ワーキンググループ
（以下 WG）」の活動内容について報告された。

議論では特に、古代アメリカに関する具体的な
誤記載の提示を具体的かつ有効な教科書出版社
戦略に位置づけた。なお、答申案を提出して解散
した WG の活動は、同一メンバーで組織する「学術
情報の普及に関わる戦略検討」班に引き継がれた。

以上の各部門の報告に対する審議を経て、2008年度事業報告は承認された。

3. 2008年度決算報告ならびに監査報告

会計担当運営委員の荒田恵役員より、2008年度決算報告が行われた。また、会計監査役員の坂井正人役員および鶴見英成役員より、2008年度の会計監査が、2009年11月28日国立民族学博物館で実施されたことが報告された。

以上の審議を経て、2008年度会計報告は承認された。

4. 2009年事業計画ならびに予算案

(1) 学会誌編集（会誌編集担当 佐藤悦夫）

2009年度予定事業として会誌『古代アメリカ』第12号の発行（2009年12月）と同第13号の編集・出版準備が提案された。第13号については、すでに論文2本の投稿があることが報告された。

一方、高騰する印刷費の削減策として、①総頁数の上限の設定（120頁を目安）②「会員の活動状況」のHP移載、③会則の削除が提案・了承された。また、投稿論文過多により、予算を超えての会誌発行を余儀なくされる場合、事前に事務局と協議することが決定した。

また、学会会計の健全化策として、編集作業を旧来のオフセット印刷方式に戻すことを総会で周知することが了承された。

なお、掲載媒体変更後の「活動状況」の原稿受付窓口は学会事務局とし、その書式も事務局が指定することが提案、了承された。

(2) 会報編集（会報編集担当 馬瀬智光、代読 佐藤吉文）

2009年1月に会報第25号、7月に会報第26号の編集・発行が提案され、了承された。

(3) 研究大会（事務幹事 佐藤吉文）

第14回研究大会・総会（大会委員長：渡部森哉会員）が、2009年12月5日（土）に南山大学名古屋キャンパスB棟22教室において実施予定であることが表明され、役員総意によって了承された。これに伴い、大会プログラムが本役員会によ

って承認された。

(4) ホームページ（広報担当 伊藤伸幸）

2009年度予定事業としてホームページ掲載情報の随時更新が提示された。

(5) 「学術情報の普及に関わる戦略検討」班（研究担当 青山和夫）

2009年度の「学術情報の普及に関わる戦略検討」班の活動案が提示された。まず、次の学会主催公開シンポジウム開催に向けて、11月13日付けで平成22年度文部科学省科学研究費補助金「研究成果公開促進費（研究成果公开发表B）」に申請済であることが報告された。

一方、前年度のWG答申案を踏まえたより具体的な活動内容として、学会として社会に対して積極的な情報発信を実施するとともに、古代アメリカ文明に関する教科書記述の改善のため、現状の正確な把握とそのデータベース化などを実施して、情報の整理と共有を図ることが提案、了承された。

(6) 名簿作成、(7) 役員選挙（事務幹事 佐藤吉文）

今年度の名簿作成と役員選挙に関する日程および実施手段について提案あった。役員選挙開票日は6月26日に設定された。また、選挙管理規定第6条（一）を踏まえて、会員調査を1月中旬より開始し、3月上旬までに会員名の作成作業を完了し、3月26日までに会員着予定で発送することが提案、了承された。

(8) 2009年度予算案

会計担当運営委員の荒田恵役員より2009年度予算案の提示があった。

これに対し、現在の学会会計状況に合わせた修正案が提示され、公開シンポジウムは外部資金獲得にその開催を委ね、会誌第13号の印刷製本も旧来のオフセット印刷方式を採用して、予算額320,000円に下方修正し、差額分を予備費に追加計上することが了承された。

また今後、研究大会での大会参加費を会員にも拡大することが了承された。

以上の審議をもって、2009年度事業計画および

予算案は了承された。

5. 会員について（事務幹事 佐藤吉文）

2008年度の新入会員、退会者、除名会員、退会希望者および、2009年12月3日現在の会員総数（172名）が報告された。また、2008年度までの会費滞納者について報告された。

所在不明会員について確認され、役員が個人的に連絡先を把握している1名については、当該役員がその責を担うことが決定された。

本会会則第11条に基づいて、2008年度総会では会員5名の除名について審議することが了承された。

6. 次期研究大会について（事務幹事 佐藤吉文）

次期研究大会開催校ならびに日程について、2010年12月4日（土）早稲田大学で開催する案が提示され、了承された。

7. その他（事務幹事 佐藤吉文）

(1) 日本学術会議によるアンケート協力依頼

日本学術会議より、「新公益法人法への対応及び学協会の機能強化のための学術団体調査」、「学術団体における知的財産」、「研究推進上での支障」に関するアンケート協力があり、事務局を中心に役員会で回答を作成し、答申したことが報告された。

(2) 学会ロゴについて

当会の会員からロゴ案を募集する案が提示され、

了承された。

(3) 非会員の研究大会参加費 500円

例年通り、第14回研究大会資料印刷費の名目で、非会員一人当たり500円の参加費を徴収することが提案され、役員会の総意によって了承された。

(4) 緊急会長声明「若手研究者に対する学術研究支援の重要性について」

行政刷新会議が推進する「事業仕分け」に対して、2009年12月2日に日本国総理大臣鳩山由紀夫氏、副総理大臣菅直人氏、内閣府、文部科学省宛に、また全学会員に対して会長緊急声明を送信するとともに、12月3日にはホームページ上にも公表したことが報告された。

(5) エルナン・アマット氏への学会誌寄贈について

今回の特別講演の謝礼として学会誌の寄贈（第3号を除く第12号までの11冊）が提案され、了承された。

(6) 年会費の値上げについて

学会会計の健全化を図るため、年会費の値上げが提案・了承された。上げ幅については、学生会員に優遇措置を設けることを前提に、一般会員を8,000円、学生会員を6,000円とする案が提示され、了承された。

以上をもって、2009年度第1回役員会は予定していたすべての議事の審議を終了した。

第14回総会報告

第14回総会議事録

日時：2009年12月5日（土）17:00-18:00

場所：南山大学名古屋キャンパスB棟22教室

議長：井上幸孝（専修大学）

書記：浅見恵理（総合研究大学院大学）

1. 開会

大貫良夫会長より総会開会の挨拶があった。

2. 定足数確認

代表幹事である関雄二役員より、総会出席者29名、委任状提出者82名、合計111名であり、総会成立定足数である全会員数（172名）の二分の一を満たしていることが報告された。

3. 議長並びに議事録署名人の選出

議長の立候補者および他薦者がなかったため、役員会を代表して関雄二役員より井上幸孝会員（専修大学）の議長推薦があり、出席者によって承

認められた。また同様に、議事録署名人には山本睦会員（日本学術振興会特別研究員）および宮野元太郎会員（山形大学）が選出され、出席者によって承認された。

4. 2008 年度事業報告

会誌『古代アメリカ』第 11 号、会報 24 号および 25 号の発行、第 13 回研究大会・総会、第 1 回古代アメリカ学会主催公開シンポジウム「マヤ文明とアンデス文明の調査と国際協力」、名義協力事業「“Centro y Procesos Sociales” Concepto vs. Contexto en los Estudios sobre la Civilización Andina para los Períodos Arcaico y Formativo」および「日本アンデス考古学調査 50 周年記念公開シンポジウム『古代アンデス文明 過去との対話』」の開催および協力、ホームページの更新、「学術情報の普及に関わる戦略検討ワーキンググループ（以下 WG）」の会合、名簿作成が、2008 年度事業計画に則って実施されたことが報告された。

また、WG による方向の成果が『古代アメリカ』第 12 号に発表されたことが報告された。

以上の各部門の報告に対する審議は最後にまとめて実施され、議長によって 2008 年度事業報告について承認確認が行われ、満場の拍手で承認を得た。

5. 2008 年度会計報告

「会計報告」に示したとおり、2008 年度決算報告が行われた。また、会計監査役員の坂井正人役員および鶴見英成役員より、2008 年度の会計監査が、2009 年 11 月 28 日国立民族学博物館で実施されたことが報告された。

2008 年度会計報告ならびに監査報告は満場の拍手をもって承認された。

6. 2009 年度事業計画案

前日の役員会において、会誌第 12 号の刊行および第 13 号の編集・出版準備、会報 27 号及び 28 号の発行。第 14 回研究大会の開催および次回大会（2010 年 12 月 4 日（土）、於早稲田大学）の開催準備、ホームページの随時更新、学会主催シンポ

ジウム開催を含む「学術情報の普及に関わる戦略検討」班による学術情報普及活動、名簿作成、役員選挙の実施が提案・承認されたことが報告された。

役員選挙の開票日である 6 月 11～25 日までの 2 週間である。

なお支出削減のため、会誌編集には事務局と編集委員が協同で版下作成に携わること、印刷をオフセット印刷方式に転換すること、「会員の活動状況」を学会ホームページに移載して総頁数を削減するとともに、削減された総頁数内での論文頁割り当て率を高めること、「活動状況」原稿は事務局がこれを一括して募集することが周知された。

7. 2009 年度予算案

次頁のとおり、2009 年度予算案が提示された。

なお、今回の予算には役員旅費補助を計上していない点、また、版下作成を学会で実施するため、次年度会誌印刷製本引当金を約 30 万円で計上している点が報告された。これに対し、収入と支出の合計金額が一致しない点、支出の欄の繰越金が 320,000 円の誤りである点が指摘され、修正された。

2009 年度の予算は拍手をもって了承された。

< 7 (1) 年会費値上げおよび大会参加費徴収（繰り上げ審議事項） >

学会予算と密接に関連するため、関雄二代表幹事の発案により「その他（1）年会費値上げ」が繰り上げて審議され、役員会が提示した新年会費案（一般会員 8000 円、学生会員 6000 円）が満場一致で承認された。なお、値上げ時期は次年度からである。

また、これと関連して、2010 度の研究大会（早稲田大学）の実施に際して、会員からの大会参加費の徴収（1,000 円程度）が提案され、満場の拍手で承認された。

8. 会員状況報告

2008 年度の新入会員（5 名）、退会者（4 名）、除名会員（5 名）ならびに 2009 年 12 月 3 日現在の会員総数（172 名）について報告された。

9. その他

(1)年会費値上げおよび大会参加費徴収
上記を参照のこと。

(2)会員の除名

5年間の会費滞納者の除名が問われた。そのうち納入の意思を示している2名については条件付き退会者とするのが提案された。

本審議項目は全会一致で承認された。

(3)日本学術会議によるアンケート調査

日本学術会議より、①「新公益法人法への対応及び学協会の機能強化のための学術団体調査」、②「学術団体における知的財産に係るアンケート」、③「研究推進上での支障に関するアンケート」の計3件のアンケート協力要請があり、役員会で回答を作成し送付したことが報告された。

(4)学会ロゴについて

継続審議中の学会ロゴ作成について、学会内で学会ロゴ・デザインを募集することが提示され、了承された。

(5)非会員の研究大会参加費について

役員会の承認を経て、非会員から第14回研究大

会の大会参加費として500円を徴収したことが報告された。

(6)会長緊急声明「若手研究者に対する学術研究支援の重要性について」

行政刷新会議が推進する「事業仕分け」に対して、2009年12月2日に日本国内閣総理大臣鳩山由紀夫氏、副総理大臣菅直人氏、内閣府、文部科学省宛に、また全学会員に対して会長緊急声明を送信するとともに、12月3日にはホームページ上にこれを公表したことが報告された。

(7)エルナン・アマット氏への学会誌寄贈について

特別講演に対する謝礼として、絶版を除く会誌計11冊を同氏に寄贈することが報告された。

10. 会長挨拶

大貫良夫会長から参加した全会員ならびに一般参加者、そして発表者へ謝辞が述べられた。また、学会活動とそれを支える会費値上げに対する理解についても謝意を示すとともに、学会活動のさらなる活発化に対する決意が述べられた。

議長の井上幸孝会員によって閉会の辞が述べられ、拍手をもって総会を終了した。

会計報告

2008年度決算報告（2008年10月1日～2009年9月30日）

収入の部

項目	予算額	決算額	増減	備考
2				

支出の部

項目	予算額	決算額	増減	備考
XXXXXXXXXXXXXXXXXXXX	XXXXXX	XXXXXX		XXXXXXXXXXXXXXXXXXXX
XXXXXXXXXXXXXXXXXXXX	XXXXXX	XXXXXX		XXXXXXXXXXXXXXXXXXXX
XXXXXXXXXXXX	XXXXXX	XXXXXX		XXXXXXXXXXXXXXXXXXXX
XXXXXX	XXXXXX	XXXXXX		XXXXXXXXXXXXXXXXXXXX
XXXXXXXXXXXXXXXXXXXX	XXXXXX	XXXXXX		
XXXXXXXXXXXX	XXXXXX	XXXXXX		
XXXXXXXXXXXXXXXXXXXX	XXXXXX	XXXXXX		XXXXXXXXXXXXXXXXXXXX
XXXXXXXXXXXX	XXXXXX	XXXXXX		
XXXXXXXXXXXXXXXXXXXX	XXXXXX	XXXXXX		XXXXXXXXXXXXXXXXXXXX
XXXXXX	XXXXXX	XXXXXX		XXXXXXXXXXXXXXXXXXXX
XXXXXX	XXXXXX	XXXXXX		
XXXXXX	XXXXXX	XXXXXX		XXXXXXXXXXXXXXXXXXXX
XXXXXXXXXXXXXXXXXXXX	XXXXXX	XXXXXX		

預かり金

項目	金額	備考
XXXXXXXXXXXXXXXXXXXX	XXXXXX	XXXXXXXXXXXXXXXXXXXX
XXXXXXXXXXXX		

決算収支	収入	支出	収支
XXXXXXXXXXXX	XXXXXX		
XXXXXXXXXXXX		XXXXXX	
XXXXXX	XXXXXX	XXXXXX	

2009年度予算案(2009年10月1日-2010年9月30日)

収入の部

項目	予算額	備考
XXXXXXXXXXXXXXXXXXXX	XXXXXX	XXXXXXXXXXXXXXXXXXXX
XXXXXXXXXXXX	XXXXXX	XXXXXXXXXXXXXXXXXXXX
XXXXXXXXXXXXXXXXXXXX	XXXXXX	XXXXXXXXXXXXXXXXXXXX
XXXXXXXXXXXX	XXXXXX	XXXXXXXXXXXXXXXXXXXX
XXXXXX	XXXXXX	XXXXXXXXXXXXXXXXXXXX
XXXXXX	XXXXXX	

総会議事録にもありますように、2009年12月5日(土)に開催された古代アメリカ学会第14回総会におきまして、年会費の値上げが決定いたしました。次の2010年度(2010年10月～2011年9月)より、年会費は一般会員8,000円、学生会員6,000円となります。以下に、年会費値上げに至った経緯について簡単にご説明いたします。

学会内外の皆様のご理解を賜り、古代アメリカ学会は現在順調に会員数を伸ばしながら、活発な学会活動を展開しております。それは、近年の研究大会での発表題目数の増加や先頃お届けした会誌最新号、昨年度初めて実施された学会主催公開シンポジウムに端的に現れております。

一方で、再三の催促にもかかわらず会費滞納者は一向に減少せず、また活発化する活動に比して会誌発行経費が増大するなど、学会の財政的基盤は危機に立たされています。これに対し、役員会は、運営会議を極力メンバーリングリスト上で展開す

るなどの経費削減に努めてまいりました。昨年末の役員会開催時には、役員全員が自主的に旅費補助を返上しております。また、会誌の印刷につきましても今年度より再びオフセット印刷方式を採用し、事務局が編集委員会による会誌編集作業を補佐して経費の削減に努める運びとなりました。さらに、学会主催シンポジウムの開催につきましても外部資金の導入に努めております。しかしながらこのままでは、来年度以降、学会の基幹活動である会誌発行さえ危ぶまれる状況にあります。

係る事態の深刻さを重く受け止めた役員会は、年会費の値上げ案を2009年度の総会に諮ることを決定し、総会において全会一致でご了承いただいた次第です。つきましては、何卒会員の皆様のご理解を賜りますようお願い申し上げます。

なお、年会費値上げについてさらにご質問のある方は、学会事務局までご連絡下さい。

<編集後記>

この研究会に入っている大学生、大学院生の方々は、日々様々な訓練や研究をし、考古学や人類学のエキスパートとなるためにがんばっておられると思います。ただ、多分にマスコミの影響が大きいのですが、大学を始めとする研究機関や、行政職、企業を含めて、高等教育を受けた学生を受け入れる場所が年々減ってきているように思います。マスコミは、独立行政法人がどうの、行政や企業は人件費を減らさなければならないと声高に叫びます。

独立行政法人や財団法人の整理や統合といえば無駄を省くように思えるかもしれませんが。官民上げて新規採用、特に高度に訓練された若手の従事する職場を減らすことが果たして経済の活性化に役立つのか、はなはだ疑問に感じます。

20代から40代の高学歴就職浪人は日本全国にいったいどれほどいるのでしょうか。彼らだけではありませんが、働く世代である彼らの就業が安定しない状況が健全な状態だとは思えません。

高学歴就職浪人の急激な増加は、各大学での講座の閉鎖、研究費の縮小、就学生の減少に結びつきます。行政においても、専門性の高い職員が継続的に業務を遂行しなければ、文化財保護はできません。

私事ですが、様々な状況証拠を積上げて専門職を増やしてすぐに、定年退職の補充がなされない現実に直面し、感じるどころが大いにあります。

人を採用することは、とても費用のかかることですが、人材はあらゆる組織にとって必要ですし、高度に訓練された専門職は、とても貴重な存在となると考えます。

既に一定の職についている私を含む世代は、次の世代が専門性や能力を発揮する場所を考えていかななくてはなりません。

マスコミの言葉に惑わされないで、一人でも多くの若手研究者の生活できる状況を確立していく重要性を感じる毎日です。(馬瀬智光)

発行 古代アメリカ学会
発行日 2010年3月31日
編集 馬瀬智光
古代アメリカ学会事務局
〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1
国立民族学博物館
電話 :
Fax :
E-mail : jssaa@sa.rwx.jp
郵便振替口座 : 00180-1-358812
ホームページ URL http://jssaa.rwx.jp/